2024.4
春・夏
No.118

鴨東通信

思文閣出版

❖ 日常語のなかの歴史31
おふくろ【お袋】 ◆清水翔太郎

❖ 特別寄稿
「ことばを書く」こと「文字を書く」こと
―『石川九楊全作品集』を自評する ◆石川九楊

❖ てぃーたいむ
歴史に埋もれた女性たちの声を聴く
◆中世日本研究所（モニカ・ベーテ／パトリシア・フィスター）
×
舘野まりみ

エッセイ
失われた作品をめぐる美術史 ◆苫名悠
歴史ブームの中の「武士」と「貴族」 ◆野口実
釈迦成道の階梯の表象 ◆田中健一
業平のひげ
―『伊勢物語　造形表現集成』刊行によせて ◆藤島綾

❖ ミレニアル世代の研究レシピ5
「通事」からみる東アジア国際関係史 ◆張子康

❖ 史料探訪79
如意輪観音菩薩坐像 ◆山田美季

石川九楊全作品集

全三冊・別冊

六月刊行予定

B4判変形上製・総約一二〇〇頁／**定価 二三〇,〇〇〇円**

書家・文学者という二つの側面から、書表現の可能性や日本語の在り方を追求してきた石川九楊（一九四五～）。本書は一九六三年から二〇二三年までの間に制作された、現存作品または資料（写真、図版等）により確認可能なすべての作品を収録した。

「書は、筆と紙の間に生じる接触、摩擦、離脱による「筆蝕（ひっしょく）」の劇（ドラマ）である」ことを見出し、書表現の極限を追求し続ける制作者・石川九楊のすべてを収めた作品集。さらに充実した附録、論考で、その多彩な表現や活動、魅力に迫る。（日・中・英語表記）　【呈内容見本】

【予定目次】

はじめに　表現の永続革命
——全作品集に寄せて　（石川九楊）

【作品】

一九六〇—一九七〇年代（約三三〇点）
一九八〇年代（約五〇〇点）
歎異抄
良寛詩
徒然草
伊勢物語
一九九〇年代（約五六〇点）
葉隠
枕草子
源氏物語
二〇〇〇年代（約二五〇点）
盃千字文
二〇一〇年代以後（約三六〇点）
河東碧梧桐
妻へ

【附録　一】

揮毫／書初（一九八五～二〇二三）
伊勢物語　帯・着物
十二か月シリーズ
サイン集

【論考】

石川九楊——筆蝕の魅力　（高階秀爾）
筆蝕のドラマ——石川九楊の世界　（建畠晳）
石川九楊のリゾーム的世界　（ツベタナ・クリステワ）

【附録　二】

書の領域と表現の可能性　（石川九楊）
関連団体
個展・出品展覧会一覧
全著作目録　附・書影一覧
略年譜
印譜

【別冊】

作品目録／索引

表示価格は税込

日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

日常語のなかの歴史31

おふくろ

《お袋》

若者の世代では、「お袋」と自らの母を呼ぶことや、「誰々のお袋さん」と知人の母を呼ぶことは、少なくなったように思われる。一方で、一九七〇年代には「おふくろさん」という母への慕情を込めた歌謡曲がヒットするなど、世代によっては「お袋」という語に親しみを感じるのではないだろうか。

「お袋」について、『日本国語大辞典』には「母親を敬っていう語」、「母親を親しんで呼ぶ語」とあり、「現在では、他人に対してへりくだって自分の母をいう場合が多い」とされる。対義語として「おやじ」が挙げられている。また語誌として「本来、母親の敬称で、高貴な対象にも使用したが、徐々に待遇価値が下がり、近世後期江戸語では、中流以下による自他の母親の称となった」と説明されている。

近世大名家の史料には、おおよそ一八世紀前半まで「御袋様」の語がみえる。秋田藩主佐竹家の史料をみていくと、初代藩主佐竹義宣に仕えた梅津政景の日記（『大日本古記録　梅津政景日記』）には、「御袋様」が登場する。政景が「御袋様」と呼んでいたのは、義宣の実母宝寿院である。宝寿院は義宣の父佐竹義重の本妻であり、戦国大名伊達晴宗の娘であった。一七世紀初頭の大名家では、大名の父の本妻が、実母として、家臣から「御袋様」と呼ばれていた。

一七世紀半ば以降になると、大名本妻は「御前様」と称され、後継者を生んだとしても、「御袋様」とは呼ばれなくなる。その一方で大名家では、本妻に子がない場合、後継者の実母を出自に関係なく、妾から大名の家族の一員まで身分上昇させ、「御袋様」として厚遇するようになる。「御袋様」は幕府から婚姻を許可されていないものの、姻戚大名の許可を得て、大名家間の贈答にも関与した。

一八世紀半ばまで、大名家の江戸屋敷において「御袋様」は、奥向の中心的な存在としてあった。しかし徳川吉宗が将軍になると、一七三〇年代にかけて、将軍が公認していない「御袋様」への身分上昇は抑制され、呼称としても用いられなくなる。

大名家において、母と子の関係に基づく「御袋様」の呼称と処遇は、時代によって変化していたのである。

（清水翔太郎・秋田大学講師）

特別寄稿

ことばを書く」こと「文字を書く」こと
―『石川九楊全作品集』を自評する

石川九楊（いしかわきゅうよう）

既発表作品一〇〇〇点、未発表の作品一〇〇〇点、これまで制作した二〇〇〇点の全作品を収録した『石川九楊全作品集』（全三巻、以下『全作品集』と略す）が六月に思文閣出版から上梓される。

編集・構成にあたって、先行の森田子龍、井上有一等のカタログレゾネを参照しながら進めていくうち、私の作品と先輩達の作品との間に横たわる明瞭な違いを身にしみて知ることになった。以下その違いを明示することによって『石川九楊全作品集』に招待したい。

多字数書と一字書　『全作品集』の作品は、歎異抄、源氏物語、戦後「荒地」の詩などさまざまな詩文の書が見られる。自作の詩句についても、学生時代の「ドクドクと血の流れ出るに任せよ」に始まり、三十歳代の「もうどこを切っても血も出ない」を経て、二十一世紀に入ると「9・11」「原発爆発」「コロナ禍」そして現在の「ヨーロッパの戦争のさなかに」へと展開している。

ところが、森田や井上にあっては、「龍」「愚」など漢字一字の書がずらりと並んでいるばかりで、詩句の揮毫は見られない。例外的に井上に宮澤賢治詩や自作「東京大空襲」が登場するが。

書道家的にいえば『全作品集』は多字数の書。後者は一字書。一見しただけでも歴然たる違いがある。多数の文字を列ねる語句、詩、文を書いた『全作品集』の作品には、文学や音楽のように構成する文字を繋ぐ文体が生じている。一字書といってもひらがなで「に」や「ぬ」と書くことはないから、一字一語の漢字語を記したもの。そこには点画を組み立てる構成はあっても、複雑で高度な「文体」を欠く。

つまり、『全作品集』の作品を領導する力は「ことば」にあり、森田や井上の作品を導く力は「文字＝漢字」にある。両者は表現する書字の原動力を異にする。

多種多様な書きぶりと反復　『全作品集』の作品の表現は同一人が書いたとも思えないほど次々とめまぐるしく変化している。同一語句でも書きぶり（筆蝕と構成）が変化する例も多い。

これに対して、森田や井上のレゾネを披くと、同じ構成、筆蝕の一字書がこれでもかこれでもかと次々と掲載されている。

それは、『全作品集』は、書かんとする「ことば」の世界の真のありかを探しあてるべく、手持ちの技法を「ああでもない、こうでもない」と投げつけ、言葉に擦過しあるいは衝突する表現を求めているからだ。

他方、先輩達には、書くべき「文字」への一定の強い書きぶり（筆蝕と構成）像という〈解〉がすでにあって、そこに網をかけるべ

く「もう一枚、もう一枚」と書きついでいるからだ。

作品史上の変貌と一定性　『全作品集』には、作品全面を墨が覆うような作品もあれば、ごく小さな文字が細密画のようにびっしり書きこまれた作品も見られる。『全作品集』の作品は、使用する道具も大筆、太筆、小筆とさまざまに使い分け、用紙もまた中国画箋紙、和画箋紙、雁皮紙さらには作品に従って次々と寸法を変えている。表現手法上でも、ニジミやカスレ、点画の肥瘦を極限まで拡張するなどさまざまな作品が次々と顔を見せている。そのような表現上の激しい変容は森田や井上のそれにはほとんど確認できない。

書は「ことば」を書く　書は「ことば」とともに生まれ、「ことば」とともに生きて行く。

「書聖」と賛えられる東晋の王羲之の書は、生老病死――人間の楽しみや苦しみを高らかに詠いあげる手紙文として生まれた。

北宋の蘇軾、黄庭堅の書は政争に敗れた中国の高級官僚の失意と挫折の詩とともに生まれている。むろん黄庭堅に李白の詩を書いた名書も出現したが、李白の詩であってももはや自らの詩のごとくに生々しく書いている。

日本でも類的で匿名的な表現を超えた平安末から鎌倉初期の藤原俊成や定家の書は和歌や歌論とともに生まれている。

近代初頭の政治家にして思想家・副島種臣も明治初期の政争とともに生まれた詩として巨大な姿を見せている。

このように書は、詩や文つまり、「ことば」とともに成立し、その詩文とともにその姿を曝している。

ところが、現在、一般には「書」というと、習字や書道を思い浮かべ、「文字を美しく整えて読みやすく書く」程度のごとく軽んじている。これは、江戸時代に生まれた寺子屋習字教育、また近代初頭の維新政府の書記官、日下部鳴鶴、巌谷一六を淵源とする書道家達の書に対する大きな曲解である。むろんそれも「書の周辺」に位置する。だが、書の根幹にあるものではなくそこから派生した枝葉末節の肥大化の風景である。

書の歴史に見てきたように、書はあくまでも「ことば」から出発するものであり、「文字」から出発する「筆耕」や「文字のデザイン」、あるいは「文字」を、動態（ドローイング）構成素とする壺や花のような景物と見做す、絵画のようなものではない。「前衛書道」と名づけられてはいても森田や井上の書もまたやはり近代書道家の延長線上の「文字」を出発点とする表現を超えるものではなかった。

表現の出発点を「ことば」に据えた『全作品集』は、書の歴史に正統につらなる作品集である。それゆえに、書を「文字」を外延的に加工表現するものと錯覚した一般には見馴れぬふしぎな作品群に思われるかもしれない。

だが、これこそが「書」である。文体を有することによって、細密画のように扱われ、また文学物語や音楽のような世界とも密通する。それは東アジア漢字文明圏に連綿と受け継がれた「ことば」の根幹にある表現である。それゆえに、西欧や世界の美術、芸術界がどのように理解し、どのようにうけとめ、扱うかは、まったく不明。「書」にとってそれはあずかり知らぬことである。（書家）

てぃーたいむ

歴史に埋もれた女性たちの声を聴く

モニカ・ベーテ（中世日本研究所所長）
パトリシア・フィスター（同研究室長）
×
舘野まりみ（早稲田大学非常勤講師）

鎌倉時代の尼僧・無外如大尼の実像に迫った『無外如大尼　生涯と伝承』を編集された中世日本研究所のお二人と、「女かぶき」の図像を美術史学の視点から分析した『女かぶき図の研究』を刊行された舘野まりみさん。かねてより親交のあるみなさんに、著書について語っていただきました。

――本のテーマと、そこにたどり着かれるまでの研究の道のりについて教えてください。

ベーテ：私が尼門跡寺院研究に携わるようになった背景はいくつかありますが、それらが全て、この度の本の出版につながります。長年携わってきたのは能楽の研究ですが、それを掘り下げていくと、能が成立した鎌倉時代に行きつきますし、題材には仏教と関連する内容が非常に多くあり、如大尼の仏教や禅宗に関する研究とも重なりました。

フィスター：如大尼は無学祖元（鎌倉時代の臨済宗の高僧）の法を継いだ尼僧です。彼女の功績は、女性でありながら厳しい修行に耐えて認められたことは勿論ですが、自分だけ悟りを開けばよいという考えを持たず、他の尼僧たちのために苦労して京都にお寺を建てて、彼女たちを導いたことも大きいです。一人の仏教信者として、そして尼僧たちの師匠として、両面で偉業を成し遂げ、後世に続く尼僧たちを勇気づけました。

ベーテ：私が所長を務める中世日本研究所は、バーバラ・ルーシュ先生が中心となって五〇年以上前にコロンビア大学で設立された組織です。六〇年代に平安や江戸の文学はよく研究されていま

したが、中世はあまり進んでいなかったので、研究グループを作るべきだと考えたんですね。それ以前は、文学、歴史、美術史はそれぞれ別の研究領域でしたが、それらの枠を超えた研究のために、また、グローバルな活動のために中世日本研究所を設立しました。日本人研究者もたくさん入っていましたよ。その後、ルーシュ先生が今回の本のテーマである如大尼の頂相彫刻と出会ったことで尼門跡研究が始まり、本格的に行うために研究所を京都にも構えました。現在、如大尼と関係があって存続している寺院は尼門跡寺院です。中心にあるのが大聖寺、宝鏡寺、宝慈院で、如大尼と縁があるのが眞如寺で、今回の出版に当たっては皆様から多大なご協力を賜りました。

フィスター：私の専門は江戸時代の美術で、特に女性画家について研究しています。当初は文人画について調べており、その間に何人かの尼僧たちに出会って興味を持ち、三十三年前に日本に来たことで禅への興味が深くなりました。尼僧画家についてもっと知りたいと思い、自力で尼門跡寺院ついて調べ始めましたが、ルーシュ先生との出会いで、より研究が深まりました。

二〇〇三年に野村美術館で「尼門跡と尼僧の美術」の展覧会をして、二〇〇九年に東京藝術大学大学美術館で「尼門跡寺院の世界」展をしました。両展覧会の間に、眞如寺に長らく保管されてきた頂相や大量の遠忌記録と出会い、その研究成果が本書に結実しています。

舘野：私が「女かぶき」の研究を始めたのは、直接的に歌舞伎や出雲のお国に対して興味があったからではなく、長唄、特に三味線方をやってきたのがきっかけです。同時に、英語を使う仕事をしていたので、英語を活かして何か学びたいと思って大学に入り直し、いろいろなクラスを見た結果「面白そう」と感じたのが美術史の授業で、そこから、美術史学の世界に足を踏み入れました。指導教官の米倉迪夫先生から「興味が続けられそうなものを選べばよい」と言われて、遊女が三味線を弾いている絵を最初の研究対象にしました。近世風俗画のいわゆる「遊楽図」と呼ばれるジャンルですね。

現代の歌舞伎は男性が演じますから「女かぶき」という語になじみは薄いかもしれません。お国が京都に上ってかぶきを始めて火がついて、その人気に目をつけた妓楼の亭主たちが、四条河原などに小屋を建てて、遊女たちに真似をさせました。私は、お国のかぶきと遊女のかぶきを合わせて「女かぶき」と呼んでいます。

当時の女かぶきで実際にどんな音楽が演奏されていたかは想像するしかないのですが、例えば遊女かぶきには、「和尚」という一番人気のスター遊女が飾り立てた曲彔（きょくろく）に座って三味線を弾いて、その周りを他の遊女たちが輪踊りする場面があるんです。おそらくメロディーを奏でるというよりはジャカジャカと派手に掻き鳴らしている、その場の高揚した雰囲気はちょっと想像できるような気がします。

――みなさんは「日本国内だけで研究していない」という点も共通していますね。「なぜ外国人研究者が日本の尼門跡寺院の研究をしてるのですか」と訊かれることはありますか。

ベーテ：あくまで私の場合ですが、面と向かってはあまり訊かれ

れません。心の中ではそう思われているのかもしれませんが。「外国人が日本の文化財の研究をやってるから、私たち日本人もやらないといけない」という考えは明治のフェノロサの時代からずっとあるかもしれませんね。六〇～七〇年代に外国人女性が日本に来て研究するのは珍しいことでしたから、男でもないし女でもない、特殊な存在に見られたようで、普通の女性に許されないような領域でも入れてもらえることがありました。

日本の常識、例えば礼儀作法に対する期待は初めからそれほど持たれていないように感じましたが、その当時の研究者たちはそれに甘えたわけではなく、逆に日本の文化に寄り添おうという姿勢、日本のことをリスペクトしながら理解しようとする努力は凄かったと思います。

フィスター：私の場合は逆で、その質問をされたことが何度かあります。見た目は外国人ですから。ただ、私は日本の女性画家たちに興味を持ったから研究をしてきただけの、一人の「日本美術史研究者」だと思っているので、自分が外国人、特別な存在であるとは普段は考えていません。

――『無外如大尼　生涯と伝承』は広く世界に如大尼について知ってもらうために日・英バイリンガルになりましたが、内容だけをみていただいたら、執筆者の国籍はわからないと思います。

■大聖寺を通じて繋がったご縁

――偶然同時刊行となった二冊の本ですが、大聖寺というキーワードで繋がっていますね。交遊が始まった経緯を教えてください。

舘野：今回の本で分析した京都国立博物館の『阿国歌舞伎図屏風』に、桟敷で観劇する秀吉らしき男性が描かれています。この作品は、秀吉と庶民が一緒になってお国かぶきを見ている「観劇図」という見方をされてきました。ただ、秀吉の隣に描かれている喝食の女の子が誰かということが特定されていませんでした。私は純粋に「当時の最高権威者の隣にいる女の子って、誰だろう？」と気になってしまって。その頃、立命館大学を中心に行われていた風俗絵画研究会に参加しておりまして、そこで川嶋將生先生の龍登院宮（後陽成天皇と女御近衛前子の第二皇女）のご研究を知って、「あれ、この人じゃないかな」と直感的に思いました。それで「お湯殿の上の日記」をひたすらめくると、彼女に相当する皇女が秀吉政権から伝奏を経て大聖寺に入って喝食になるとあったので、大聖寺を調査させていただきたいと考えましたが、皇室ゆかりの通常非公開のお寺ですから、正面から突入するには腰が引けました。そこで泉涌寺様にお願いして、泉涌寺のお坊様と、西谷功先生と米倉先生と私で、龍登院宮像を見せていただいた。その後ですね。「龍登院宮について調べている人がいる」と聞いたベーテ先生が、資料をどーんとくださった。

ベーテ：ちょうど東京藝大の展覧会のために、舘野さんとは全然違う観点から興味をもって、あるだけの資料を集めていました。

舘野：なかなかお寺からも出てこないようなものを、新米の研究者に、期待と信用をもって全部シェアしてくださったんです。

■歴史の中の女性の足跡

――みなさんは研究の中で、女性の足跡を追ってこられましたね。対象が女性だから追跡が難しかったというのはありますか。

ベーテ：鎌倉時代の女性の出自については確かなことが記録されていないので、親は誰かとか、細かいところまでたどり着くのは難しいことでした。歴史が専門の原田正俊先生も今回の本のためにかなり調べられましたが、女性が記録に残ることは稀ですから。当時の記録には、「誰それの息女（娘）」あるいは「誰それの妹」としかありません。

フィスター：私の専門である江戸時代の場合は、ちょっと掘ってみたらびっくりするくらい出て来た、という逆の経験があります。「女性画家について調べている」と言うと、地方からも「こんな作品・資料がある」という情報提供が相次ぎました。研究を始めた当初は、こんなに大勢女性画家がいるとは思いませんでした。

ベーテ氏　　舘野氏

舘野：私の場合は、お国の出自等については芸能史研究の方で、特に小笠原恭子先生がされましたから、そこを深く追求しようとは考えませんでした。ただ、面白いなと思ったのは、現代の小説や舞台だと、お国は「革新的で、カリスマ性があって、踊りを愛した、かっこよい美人」となるんですね。だけど「当代記」には、「京都にお国という出雲大社の巫女を名乗る女がやってきて、かぶき踊りということをした」という記述の中に割注で、「ただし好女にあらず」とある。要するに「美女じゃない」ということをわざわざ割注で断っている。そこにリアリティが感じられます。

ベーテ：つまり歴史上の女性たちは、龍登院宮みたいに夭折してしまうと、いつの間にか記録から姿が消え存在したかどうかわからなくなるという難しさがあり、逆にお国や如大尼のように有名になりすぎると、尾ひれがついてしまうこともある。歴史上、重要な女性はだいたい「美人」に落ち着く。如大さんも実際はどうだったか知りませんけど、人々の心を惹きつけられる人だから、綺麗な人ということになるんですね。女性だと。だから、足跡が残ってないということだけではなくて、後から付け加えられた説を整理するのは大変ですね。疑わしい説は全部捨てることもできるけれど、簡単には省きにくいです。どんな説も実際の情報が何か入ってるかもしれないと思えば、捨てにくいです。

フィスター：如大尼は今まで、複数の女性の伝記が混同された形で記憶されてきました。つまり「無著尼」「千代野」という別名を持った女性として歴史に刻まれていました。今回の本で、原田先生、カレン・ゲーハート先生の御尽力が大きいですが、史実を整理したことで、八百年の時を超えて、それぞれがひとりの女性として歴史に名を刻むことが出来た、これはとても大きなことです。

ベーテ：龍登院宮のように、存在は忘れられても肖像画が残っていたりすると、「この人は誰ですか？」と、不思議な幻の人になり

ますね。だから、舘野さんが今回の本で、秀吉の隣に座っている幻の女の子が誰か調べてくださって、彼女がとても大事な存在であった、だから絵の中に思い出として残されているということがわかって、すごく有り難かったです。

舘野：亡くなって何年もたてばわからなくなりますね。後陽成天皇の后である前子は十一人か十二人の子供を産んでます。二番目の女の子（龍登院宮）が亡くなっても、その年ぐらいにまた産んでいるから、日記上では、その後に生まれた皇女と記憶がごっちゃになったり、そのうちに、亡くなった人のことは日記に書かれなくなるので、跡が追えません。

フィスター：尼門跡寺院では、寺を守り伝えるために、寺に連なる故人を忘れないこと、つまり供養や顕彰を継続して行いました。宝鏡寺の中興の祖は後西天皇の皇女である徳厳理豊（とくごんりほう）ですが、彼女は如大尼の事績をよみがえらせるために、関連資料を出来る限り集めて伝記を編纂しました。今回の本にカラーで掲載する『胡蝶（こちょう）の夢語（ゆめがたり）』は、理豊が寺の後継者になる者に向けて住持の重要な心がけを記した訓戒の巻物ですが、如大尼にも関わるとてもユニークな史料です。理豊は優れた女性画家でもあり、自画像も残しました。

■実体験・実物から研究をスタートする

――ベーテ先生は過去に袈裟の研究もされていましたね。

ベーテ：染織から袈裟にたどり着きました。日本に来たばかりの頃は、なんでもかんでも面白かった。能の実演を学び、謡曲研究もしました。なかでも能装束については「織りがわからないと理解できないな」と思って、織機を買いました。

舘野：そこからですか。凄いですね。

ベーテ：本当にゼロからやりますよ。それで、志村ふくみさんと出会って、染めも習ったんです。その後、ルーシュ先生が研究所を京都に設立するにあたって、かつての教え子である私も呼ばれて、尼門跡関係の染織品の調査を京博（当時）の山川曉先生と一緒に始めました。ここで、「自分で織る・染める」から、「昔の染織品を研究する」へと、染織との関わり方が変わりました。そういう歩み方ですから、私の研究の道のりは「ストレート」じゃないんです。「すべてが面白い」は、ずっと続いていますが。

舘野：私の本も染織にちょっとだけですが触れています。私は京博の『阿国歌舞伎図屏風』の注文主はねねであると推定しました。作品に描かれた桟敷には、秀吉と龍登院宮と、その隣にねねと思われる尼姿の婦人がいます。それから、観客の中に貴婦人が三人いて、そこだけ特別な描かれ方なんです。この貴婦人たちは秀吉のいる桟敷に視線を向けていて、そのうちの一番年長に見える女性は、直接は秀吉の方を見ていなくて、隣にいるやや若い女性の顔を見ている。私はこの若い女性を近衛前子、つまり龍登院宮の母、後陽成天皇の后だと本の中で推定しました。先ほど申し上げた前子に視線を向ける婦人が衣被ぎしている小袖は、桐模様なんですよね。そうすると、桟敷にいる尼姿の婦人が「出家してからのねねの姿」で、前子の顔を見ている桐模様の小袖を衣被ぎする貴婦人は「出家以前のねねの姿」かなと仮説を立てたら、二〇一

九年に発表された、京博が調査した高台寺の打敷がねねが着用し寄進した小袖から作られたもので、それが桐模様だったので、その仮説は強化されました。もちろん、その打敷が描かれている小袖そのものだとは思っていませんが、桐模様の小袖をおそらくいくつも持っていて、そのうちの一つを大事に打敷に仕立てたのではないでしょうか。

――舘野先生は複数の絵画作品についてこれまでと別の解釈を示しました。研究所のみなさんは、如大にまつわる伝承を検証して真偽を分けることに挑戦されました。過去に提示された説を鵜呑みにせず検証していこうとする姿勢も共通してますね。

ベーテ：やっぱり実際に織物をしたり、自分で体験してるのは大きいかもしれません。染織品でも、伝わって来た現物に触れて、そこから情報を正しく読み取れるかどうか。その時、オープンマインドが大事ですね。私も間違っている可能性はありますが。

舘野：私は「今までの説を更新したい」という気持ちがあったわけではなく、逆に言うと、今までの説をそんなに知らなかったんです。遅いスタートをしたので、著名な先生方のお名前すら知らなかったわけですから、先入観もない。あるのは目の前の作品だけ。

フィスター氏

例えば、京博の『阿国歌舞伎図屏風』を見たときに最初に気になったことがありまして、普通、屏風はアコーディオンみたいに折って立てますよね。でも、図録などに紹介される場合、ベタっと平らにした状態の写真が多いです。京博の『阿国歌舞伎図屏風』は、平らの状態では中央に描かれた舞台の形が不等辺の台形になっていて違和感を覚えました。それで、自分で紙に印刷して、六曲に折ってみたり伸ばしてみたりして。すると、六曲に折って立ててみると舞台が正方形に見えることに気が付きました。形が変わるということは、これを当時鑑賞した人にこの舞台がより立体的にリアルに見えるように、意識して描かれたということでしょう。じゃあ、この「鑑賞者」って、いったい誰？　ということを考えたのです。作品に対峙して「これはどういう目的で作られたのか？　誰が見るのか？」と問う姿勢を今回の本では大事にしてきたつもりです。

ベーテ：長い年月を超えて伝わってきた、目の前にあるモノから出発する。「なぜこれはここにあるの？」と思って、文献を探して読んでいると、問題点に行き着きます。そうすると、次はこの文献も読まないといけない。そういう風にどんどん広がって、あっちへ行ったりこっちへ来たり、で、またモノに戻ってくる。できるだけ網羅的に調べながら、時には少し適当だったり。問題に出くわしたら、解決できるかどうかわからないことでも、とりあえずやってみる。そうやって、ここまで来ましたね。今回の本から、長い年月を経てもなお語り継がれる尼僧たちの姿を、残されたモノから感じて、歴史の中を旅して欲しいですね。色々なものと出会うことで見えてくるものがあると思います。

（二〇二四年二月二九日　於中世日本研究所）

失われた作品をめぐる美術史

苫名（とまな）　悠（ゆう）

この度、思文閣出版より拙著『失われた院政期絵巻の研究』が刊行された。文字通り、原本がすでに失われた院政期絵巻の作例を研究対象として取り上げ、模本などを手掛かりとして各作例の美術史的位置を検討することにより、院政期絵巻の全体像を探るための足掛かりを築こうとするものである。小文では、「失われた院政期絵巻」というややマイナーな作品群を研究することとなった経緯をできるだけ率直に紹介しようと思う。

勝手な憶測で恐縮だが、美術史研究者は、自身の琴線に触れた作品を最初の研究対象とすることが多いのではないかと思う。筆者もその例に漏れず、日本美術史を専攻することになった学部三年次の春、図書館で『日本の絵巻』シリーズを眺めていた際に目にした《信貴山縁起絵巻（しぎさんえんぎ）》の雄大な山水表現と、どことなくおおらかな雰囲気に心ひかれ、この絵巻について卒業論文を書くことにした。

日本絵画史上屈指の名品である《信貴山縁起絵巻》の引力は強く、その後、筆者は卒業論文も修士論文もこの絵巻について書くことになるのだが、美術・仏教・文学・ジェンダー等々の諸分野にまたがる多様な論点を孕み、分厚い研究史を持つこの絵巻の壁は高かった。結局、博士後期課程の後半に差し掛かっても論文を世に出すことはできず、その間、他の絵巻を対象として論文を書くことを試みるも、そもそも美術史学という学問の趣旨を取り違えていたところもあり、良い結果は得られなかった。

そのような中で「失われた院政期絵巻」研究に行き着くことになるのだが、そのきっかけとなったのは、博士後期課程の二年目が終わろうとしていた二〇一七年三月に、アメリカで開催された日本美術史に関する国際大学院生会議（JAWS）に参加させていただいたことである。そこで同世代の研究者が充実した発表をされているのを目の当たりにしてショックを受けた筆者は、このままではいけないという気持ちを抱いて帰国した。

その後、どうにかして自分の進むべき道筋を見出さなければともがいていた時、行先を照らしてくれたのが、千野香織氏による「神護寺蔵「山水屏風」の構成と絵画史的位置」（千野香織著作集編集

委員会編『千野香織著作集』ブリュッケ、二〇一〇年、初出は一九七九年）をはじめとする、平安時代のやまと絵・名所絵をめぐる諸論文であった。やまと絵研究者にとって必読といえる千野氏の諸論文は学部生の時に一通り読んでいたのだが、あまりに浅学（修辞ではなく言葉通りの意味で）であったために、その価値を十分に理解できていなかったのである。改めてこれらの諸論文に向き合った筆者は、現存作例の精緻な観察と文献史料の博捜・分析とを組み合わせることにより、作品のほとんどが失われてしまった平安時代やまと絵・名所絵の成立と展開の諸相を詳らかにしていく、千野氏の明晰な論述に魅了された。

筆者にとって特に刺激的であったのは、すでに地上から失われてしまった作品群の様相が活き活きと描き出されているように感じられたことである。思い返せば、幼少期から恐竜や天体など、いまは目の前にないものに惹かれる傾向があり、その後歴史に興味を持ち、最終的に日本美術史を専攻するに至ったことも、恐らくはその延長線上にある。もちろん、千野氏による諸論文の趣旨は、失われた作品群の様相を復元的に考察することのみにあるわけではないのだが、当時、自分の性質に合った研究の活路を見出すべく必死になっていた筆者の心に特に響いたのは、この点であった。

このような経緯で、「失われた院政期絵巻」を当面の研究対象にしようと決め、その後、《彦火々出見尊絵巻》・《後三年合戦絵巻》・《放屁合戦絵巻》・《勝絵》等の作品について調べて、順次小論を書き、博士論文を執筆した。そして、これに基づいて書いたのが、今回の拙著である。実際に千野氏にお会いすることは叶わなかったが（千野氏が逝去された時、筆者はまだ「美術史」という学問の存在も知らない小学生だった）、数々の論文を通じて蒙った学恩にただただ感謝するばかりである。

ところで、「失われた院政期絵巻」について研究する過程で気がついたのは、この作品群に関心を寄せている方が、思いのほか多いということである。特に、「失われた院政期絵巻」の模本は近世に写されたものが多いため、その調査にあたっては近世絵画の研究者にご教示をいただくこともしばしばあったのだが、これらの方々が「失われた院政期絵巻」に少なからぬ関心を抱かれていることを知ったのは、嬉しい驚きであった。筆者は「失われた院政期絵巻」の素性を明らかにしようとしているため、その原本の図様に遡源すべく模本を観察することが多かったのだが、近世絵画研究者の方々は、近世における院政期絵巻イメージの形成、院政期絵巻図様の伝播等々の観点から、これらの模本を観察されているように感じた。今後、「失われた院政期絵巻」を結節点として、専門とする時代や観点を異にする研究者たちの協働による多角的な研究を行うことができれば、何よりの幸いである。

（佛教大学講師）

苫名悠著

『失われた院政期絵巻の研究』

A5判上製・三五八頁／**定価 八、二五〇円**

▼詳細35頁

歴史ブームの中の「武士」と「貴族」

野口（のぐち） 実（みのる）

ここ数年、国際日本文化センターの倉本一宏教授が代表をつとめる「貴族とは何か、武士とは何か」という研究プロジェクトに参加させて頂いた。三月にこの研究成果が論文集の形になって刊行された。私も坂東武士に関するコラムを執筆させて頂いたが、様々なジャンルから参加されているメンバーの研究成果を拝読するのが楽しみであった。

日本では長く武士による政権が続き、「武士的なるもの」の行動形態をプラス評価する考え方が人々の心を支配してきた。周囲を見回すと、いわゆる体育会的発想が思い当たる。体罰・厳しい上下関係・長幼序列・上意下達・事大主義・集団主義・忖度などの言葉が浮かぶが、それぞれ重なり合うところもある。これら全てが武士の本来的属性とは言えないが、近世に観念化され、大衆文学や芸能によって増幅・普及されたものが前提となって、近代の軍国国家、戦後の企業社会の精神的なバックボーンとなったものである。そこでイメージ化された「武士」は、男らしくて潔く、物事を深く問い詰めてイジイジと悩んだりはしない。明るく健康的で真っ直ぐな精神をよしとする。

その対極に置かれたのが「貴族」である。その通俗的なイメージは以下のようなものだろう。彼らは女々しく陰湿に物事を考え、退廃的で不健康である。だから、明るい太陽のもとにいることよりも夜を好む。額に汗するような行動を忌避して非生産的な詩歌管弦をこととする。一言で言えば「文弱」。嫌悪・唾棄されるべき気味の悪い存在である。

「武士と貴族」の対比は、「男と女」の対比にオーバーラップする。さらに、両者の「健全と退廃」・「質朴と虚栄」という関係は、空間ないしは地域的に「農村と都市」、あるいは「鄙と都」、「東と西」といった対立認識を導くことになる。

このような武士と貴族に対する理解が世間に蔓延した背景には、戦後の歴史学界を風靡した階級闘争史観との整合も指摘できる。古代から中世への展開が、抑圧された武士による搾取する貴族への抵抗の動きとして論じられたからである。そして面白いことに、「男と女」の問題だけは、棚上げされたまま引き継がれてしまった。階級闘争史観を信奉した当事者が、すっかり戦前来の武士を善とする認識に染まっていたからであろう。

日本人の「歴史好き」は、要するに「武士好き」ということだといわれる。たしかに、NHKの大河ドラマの主人公は武士ばかりで、そうでないと視聴率が稼げないらしい。かつて郷土史家と呼ばれた方たちの関心も、地元の生んだ武将の一族の系譜や、城・合戦に向けられることが多かった。最近ではこれに『信長の野望』のような歴史シミュレーションゲームから興味を持った世代を皮切りに、「刀剣オタク」や「歴女」と呼ばれる若い歴史ファンもあらわれて、歴史はブーム化しているが、ここでも、やはり武士なのである。

筆者と同世代の中世史研究者である市村高男氏は、最近の著書の「あとがき」で、昨今の歴史ブームが「人文科学を軽視する風潮」の上に構築されていることと、それに抗うことの難しさを述べておられる（『足利成氏の生涯』吉川弘文館、二〇二二年）。

前世紀末の頃、階級闘争史観に基づく戦後歴史学への反省もあって、時系列より空間・心性を重視する「社会史」が日本中世史学界を席巻したことがあった。そこでは人々の社会生活における身辺雑事から始まって「穢」や差別、さらには、日本文化の本質に至るまで真摯な議論が闘わされていた。高橋昌明氏の『酒呑童子の誕生』（中公新書、一九九二年）は、その代表的な成果といえるだろう。高橋氏はこの本の中で武士と陰陽師を職能論という切り口から「境界」の番人に位置づけ、「辟邪」の担い手として評価した。日本社会の排他性などを考える上で極めて示唆に富む問題提起がなされていた。しかし、こうした成果は正面から受けとめられず、安倍晴明ブームに見られるような、妖怪退治のカルトコミックのごときファンタジーに換骨奪胎されてしまった観がある。

一方、「貴族」は文学作品に基づく女性的で優雅なイメージが再生産されて、それなりのファンを持ち続けているが、政治・社会史の観点からその実像を追究した研究は少ない。個々の人物の研究も古典文学の研究者によるものばかりである。だから、勅撰集に一首でも歌をのこした貴族は、政治・社会的活動は無視されて、すべからく「歌人」の枠に収められてしまう。

近年の「歴史ブーム」は近世の大衆芸能以上の威力をもつ電子メディアの成果の一端のような気がする。しかし、そこで語られる歴史は「面白おかしい」ことばかりなのである。ほんとうに、それに抗うことは難しい。

貴族も武士も時代によってその風貌は大きく相違する。中世前期の軍事貴族と近世の「サムライ」は別物と見てよいし、貴族は権力を喪失した中世後期に至って自ら「文」の担い手であることにアイデンティティをもとめたという。女性の社会的位相の理解に端的に見られるように、日本人の歴史における自己認識は事実とは異なるイメージに支配されている。人文科学が軽視される風潮に抗しつつ、せめて実像の過去を捏造と妄想の闇の中から解放する作業を続けていきたいものである。

（京都女子大学名誉教授）

『貴族とは何か、武士とは何か』
倉本一宏編
A5判上製・六九六頁／定価二一,〇〇〇円
▼詳細26頁

釈迦成道の階梯の表象

田中健一（たなか けんいち）

今年一月に東京水道橋の宝生能楽堂で「大原御幸」を観能した。「大原御幸」は『平家物語』灌頂巻に基づき、大原寂光院に隠棲する安徳天皇の母建礼門院（シテ）のもとを後白河法皇（ツレ）が訪れ、建礼門院が安徳天皇の最後を物語るという筋書きをもつ。なかでも深い印象を受けたのは、生きながらに六道を見たという建礼門院の語りである。国母としての楽も忽ち天人の五衰のように衰え、平家の一門が西海に漂う船中は、水があっても飲むことがかなわぬ餓鬼道のよう、荒波に船が覆るかと泣き叫ぶ様は叫喚地獄、陸の合戦は修羅道、軍馬の蹄の音は畜生道に他ならない、これらの苦しみは人道にあって我が身の苦である。輪廻を眼前の世界にみる思考はひとり建礼門院のみのものではないだろう。

さらに別の場面に触れたい。後白河法皇が大原を訪ねた際、建礼門院は樒（しきみ）を摘もうと花筐を持って深山に上って不在だった。院が山に入る際の謡は次のようである（寶生流謡本より引用）。

シテ：たとへは便なき事なれども、悉達太子は浄飯王の都を出で、檀特山のさがしき道を凌ぎ、菜摘み、水汲み薪

地　：とりどり様々に難行し仙人に、仕えさせ給ひて、終に成道なるとかや、我も佛の為なれば、御花筐とりどり、猶山深く入り給ふ、猶山深く入り給ふ

『平家物語』灌頂巻の該当箇所は阿波の内侍の言葉（岩波文庫版『平家物語』より引用）。

悉達太子は十九にて、伽耶城を出て、檀徳山のふもとにて、木葉をつらねてはだへをかくし、嶺にのぼりて薪をとり、谷にくだりて水をむすび、難行・苦行の功によって、遂に成等正覚し給ひき

ともに悉達太子の悟りが山中での苦行・難行によることを語り、さらに山中での悉達太子を大原で過ごす自らに重ねるが、やや表現が異なる。『平家物語』では「木葉によって肌を隠し」と、院らの身に着ける粗末な僧衣が悉達太子のそれに比される。それに対して、能「大原御幸」では佛に供えるために深山で樒を摘む建礼門院を、山中で「仙人に仕え」る悉達太子の姿に重ね合わせるかのようである。これは仏前に草花を供えることの儀礼的な意味を示すレトリックとしても興味深い。

ここで生じる疑問は、釈迦は苦行を否定したのではなかったか、

という点だろう。また「仙人に仕えた」とは何を意味するのだろうか。一般的な仏伝の理解では、釈迦は悟りを求めて「雪山」に入り、断食などの壮絶な「苦行」を行ったのち肉体を苛む無益を悟って山を下りた、スジャータの粥供養によって体力を回復し、菩提樹のもと「草座」に坐して禅定に入り悟りを得た。

約八十年の釈迦の生涯のうち「苦行」は六年間にすぎず、釈迦の成道の過程・意義については古来様々な解釈が行われた。それに応じて生まれた造形作品もまことに多様である。近年、京都大学人文科学研究所の稲本泰生氏を中心として「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」「東アジア仏教美術における仏伝の表象」をテーマとする研究プロジェクトが相次いで組織され、この間の問題も豊富な事例をもとに議論され、私も日本美術史研究の立場から末席に連なって多くの刺激を受けた。この研究プロジェクトは、思文閣出版より刊行された論集『釈迦信仰の美術』に結実した。

本書のうち西谷功「草座釈迦像とその儀礼」および板倉聖哲「一休宗純賛「苦行釈迦図」（京都・真珠庵）の図像的淵源」が右の疑問に直接関わる。近代以降の学説では、「草座」「出山」の釈迦像・釈迦図は苦行への否定的主題と捉えられてきた。これに対し西谷氏は、二〜三世紀に訳出された初期漢訳仏典『修行本起経』などが成道への階梯の一つとして「苦行」を重視していることに注目し、東アジアにおいては「草座」「出山」に否定的イメージが存在せず、同主題の造形作品が唐代以降、通仏教的な儀礼と文化のなかで機能したことを論証した。また板倉氏は苦行を「佛祖玄旨（佛祖として奥深く大切）」とまで述べる表題作の一休賛文に禅僧たちへの批判を読み取る。『平家物語』における山中苦行への言及もこれらに併行する現象だろう。

それでは「仙人に仕えた」はどうか。ここでは両テキストとも悉達太子の入った山を「檀特（徳）山」とすることに注目したい。檀徳山は釈迦の過去世（本生）説話のひとつ、婆羅門の求めに応じて国城、妻子、象などあらゆる財産を布施したというスダナ太子本生の舞台で、直接的には誤伝というべきものと思われる。ただし、スダナ太子の布施行は仏伝の降魔成道場面でも重視されており、釈迦の成道を妨げようとする魔王に対し、釈迦は地神を呼び出し、地神は過去世における身体・財産の布施をもって成道の正当性を証明した。このうち財産の布施は「国城妻子象馬珍宝」（『過去現在因果経』）と表現され、スダナ太子本生が財施の代表とされた。釈迦成道の階梯を表象する本説話に関する造形遺品は、銭弘叔塔など東アジアに広く分布している。「仙人に仕えた」というのは、釈迦過去世における布施のイメージが混入し、さらに草花の供養（福田としての佛への供養）に重ね合わされたものではあるまいか。

西谷氏は先の論考において「草座釈迦」の図像に釈迦の過去世（本生）説話が混淆し、仏伝自体が増広した事例を紹介している。「大原御幸」での、佛のため花筐を持ち山深く入る建礼門院の姿もまた、仏伝イメージが増広した一事例といえるのかもしれない。

（京都大学准教授）

業平のひげ
―『伊勢物語　造形表現集成』刊行によせて

藤島　綾

日本の文芸史上、在原業平ほど絵に描かれた人はないだろう。『伊勢物語』の絵は平安時代すでにあったと推定され（『源氏物語』「絵合」巻などによる）、中世には数々の絵巻・絵本の写本が制作されている。近世になると絵入り版本が版を重ねた。また、歌人として名声が高く、歌仙絵や百人一首絵には欠かせない。

その業平が五六歳で世を去ったのは元慶四年（八八〇）五月二八日、今から一一四四年前のこと。以来業平の存在を語り伝えてきたのが『伊勢物語』である。登場する「男」の実名こそ明かさないが、「在五中将」（第六十三段）、「殿上にさぶらひける在原なりける男」（第六十五段）と、業平を連想させるキーワードを随所に散りばめる。元服後、狩りに出かけた春日の里で垣間見た姉妹に歌を贈る話に始まり、病床で迫り来る死を詠んだ歌で終わる構成は、一代記を思わせる。その内容については、鎌倉時代の注釈書が虚構を含むと指摘し、江戸時代の国学者が実録との理解を否定することもあった。しかし、物語のたくみな構成は、数々の恋愛に彩られ、友情、恩愛、失意、旅に生きた色好みの貴公子像を人々に植え付けてきた。ただ、影響力の大きさに比して、作品としては小編である。通行本は一二五段で、二〇九首の和歌を持つ。章段による違いはあるが、総じて記事は簡略で分量も少ない。加藤洋介氏は、四百字詰原稿用紙にして七〇枚程度であると指摘している（「伊勢物語の書物」、国文学研究資料館特別展示図録『伊勢物語のかがやき―鉄心斎文庫の世界―』国文学研究資料館、二〇一七年）。

業平に対し、若く美しい悲運の貴公子というイメージを持つ人は多い。二条后との悲恋とその後を描く物語前半は見所のひとつで、若さと痛ましさが強く印象に残る。ただ、業平の容貌については、「かたちのいとめでたくおはしければ」（第六段）とされる二条后や「顔かたちよくおはしまして」（第六十五段）と明確に形容される清和天皇とくらべて、ややあいまいに思える。

一方、彼の死から約二〇年後に成立した『日本三代実録』は、業平について「体貌閑麗」と記し、美しい容姿だったと伝える。室町時代随一の碩学一条兼良が、業平を「閑麗翁」（『伊勢物語愚見抄』文明六年本）と称するのも、この記事の影響だろう。兼良が思い描

く業平は美しい翁だったということであろうか。

ただ、考えてみれば、容貌に関する記述の多寡は、貴人の顔を引目鉤鼻で表現するやまと絵の描写には大きく影響しないのかもしれない。物語絵や歌仙絵の業平は、狩衣姿や武官姿で、装束に業平菱や忍草の文様が施されるなど、むしろ顔以外に工夫が見られるものが少なくない。

さて、最近、私は、業平像のひげに注目している。『宗達伊勢物語図色紙』（羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会編、二〇一三年、思文閣出版）所載の「芥川図」がきっかけであった。物語第六段、女を連れ出した男が芥川まで逃げてくる。草の上の露を見た女が「あれは何か」と訊ねる場面。色紙には男と背負われた女が描かれる。青木賜鶴子氏の同書解説には、この図の表現が、基本的に「異本伊勢物語絵巻」（東京国立博物館蔵）のそれに拠ること、男女が見つめ合う様子は異本絵巻と宗達色紙とに確認される珍しい描写であることが記され、比較のための図も掲出されている。ところが、絵巻には描かれているひげが、色紙には描かれていない。

異本絵巻のひげの描写を、宗達色紙が取り入れなかったのはなぜだろうか。色紙のこの図は、「活動的な男絵系」の異本絵巻に取材しつつも、技法や様式は「情緒的な女絵系」に変化していることを山根有三氏が指摘している（「伝宗達筆伊勢物語図色紙の芥川図について」、『新修日本絵巻物全集』月報28、角川書店、一九八〇年）。ひげの描写の違いはそのような変化のひとつだろうか。また、江戸時代にはひげの禁令が出たとされ、天皇の肖像を調査した黒田日出男氏が、ひげを描くのは後陽成天皇までとし、身分にかかわらず、「無髭」である社会こそが近世であると述べる点も興味深い（「髭」の中世と近世―髭から何がわかるか―」（『週刊朝日百科（日本の歴史 別冊七／三〇 歴史の読み方1 絵画史料の読み方）』、朝日新聞社、一九八八年）。一方、『源氏物語』「行幸」巻で、若い玉鬘が髭黒大将の容貌を好まないことなども思い出される。そもそも異本絵巻はなぜ業平の顔にひげを描いたのだろう。表現の背景をめぐって興味は尽きない。

ささやかな描写を確認していくのには時間や手間がかかる。しかし、近年あいついだ図録や単行本の公刊やインターネット上での高精細画像の公開は、多くの業平像の存在を教えてくれた。たとえば、『伊勢物語絵巻絵本大成』（羽衣国際大学日本文化研究所編、角川学芸出版、二〇〇七年）所収のスペンサー・コレクション本絵巻（ニューヨーク公共図書館蔵）にも有髭の業平を確認できる。また、展覧会や調査を通じた資料の熟覧も可能だ。多様な表現を目にする機会は今後もますます増えるだろう。

平安時代以来、『伊勢物語』をめぐる表現は、文学、芸術、芸能とさまざまな分野で展開した。いったいどのような工夫が凝らされたのだろう。そして、世界にどれほど伝存するのだろう。千年以上の歳月のなかで作り出されてきた多彩な造形表現に心を寄せる者にとって、充実した情報と専門家たちによる最新の研究をおさめた『伊勢物語 造形表現集成』は良き道標となることだろう。

（都留文科大学講師）

河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子編
『伊勢物語 造形表現集成』
B5判上製・四二三頁／定価二七,五〇〇円
▼詳細34頁

「通事」からみる東アジア国際関係史

張（ちょう） 子康（しこう）

これまでの私の研究対象は、一九世紀の琉球国を中心とする、東アジア地域の多元的な国際関係である。この時代の琉球国は、清朝中国との伝統的な朝貢冊封関係を維持しながら、薩摩藩を通して徳川日本の幕藩体制にも組み込まれ、両者の間にあって絶妙なバランスをとりながら国家運営を行っていた。一九世紀以降はこれに西洋諸国との関係が加わり、国家運営はさらに複雑化していく。

私の関心は、このように複雑な琉球の対外関係を、具体的に維持・運営した現場の人員にある。いわゆる「国際関係史」の研究は、その名の通り、国家のレベルで検討・分析されることが多い。琉球・沖縄史の領域でも、琉球という国家の戦略、論理、主体性といった点が重視されてきた。しかしながら、国家間の交渉も、突き詰めれば現場における個人間の対話の積み重ねに他ならない。琉球において（後述するように、琉球に限らないが）、その対外関係を現場で具体的に担っていたのは「通事（通詞）」と呼ばれる人員であった。通事は、おおむね現代の「通訳」に相当する。

具体例として、有名な「黒船来航」を取り上げよう。一八五三年六月、マシュー・ペリー提督率いるアメリカ艦隊が浦賀沖に現れ、江戸幕府に大統領の親書を突きつけた上で、その翌年には再度日本を訪れ、幕府と日米和親条約を締結したことは周知の事実であろう。一方、ペリー艦隊が浦賀の前にまずは琉球の那覇港に来航していたこと、日本への再渡航までの一年間、艦隊が琉球を前哨拠点として利用していたこと、日米和親条約締結後は琉球とも「約定」を締結したことなどは、あまり知られていない。

ペリー艦隊が那覇港に姿を現した時、アメリカ人に対応したのは「通事係」と呼ばれる一群の役人であった。一九世紀以降急増する西洋船の来航、キリスト教宣教師の滞在という異常事態を受け、琉球は中国語をよくしつつ、英語も（少しは）話せる通事を養成し、西洋人対応の最前線に配置していた。これらの通事は、西洋人と琉球側の会談における通訳はもちろん、艦隊の補給品手配、上陸した西洋人の追跡・監視、不法行為に対する抗議申し入れ等々、多岐にわたる任務を担った。

日中両国との関係から成る伝統的秩序の維持を何よりも求めた琉球は、基本的には西洋人のあらゆる要求を拒絶する大前提を持

ちながら、圧倒的な軍事的脅威であった西洋人の「機嫌を損ねてはならず」、琉球の通事たちは板挟みの中で任務に取り組まねばならなかった。さらに言えば、琉球政府中枢は西洋人との直接交渉を可能な限り回避し、通事ら下級役人に対応を委ねることで責任の所在を曖昧化しようとしたから、通事たちは自らの裁量で対応しなければならないことも多々あった。

ところで、ペリー艦隊が浦賀沖に現れた際、これに対応した最初の日本人の一人も通事であった。艦隊に随行した宣教師ウィリアムズの記録によれば、日本側の第一声はこの通事が英語で発した「私はオランダ語を話せる（I can speak Dutch）」であり、以後オランダ語が交渉の言語となった（同時に漢文も使われた）。この人物は、長崎から浦賀に派遣されてきた「オランダ通詞」の一人である。

このような通事という職は、琉球や江戸時代の日本にとどまらず、前近代の東アジア諸地域に普遍的に見られた。良く知られたものとして、長崎のオランダ通詞、唐通事がまず挙げられようし、対馬藩の朝鮮通事も有名である。中国では、広州に来航した西洋商人に対応したカントン通事が比較的知られている。また、琉球についても、伝統的に中国との関係において琉球（那覇）・中国（福州）双方に通事が置かれていた。東アジア各国は、自国と他国の結節点となる都市、異なる人々が出会う境界地域に通事を配置し、通事を通して各国にやってくる「外国人」に対応した。

さて、現代的な感覚からすれば、東アジア地域の各国が「通事＝通訳」を組織したことは、当然のことに思われるだろう。ところが、歴史的に見てこれは非常にユニークな現象である。

異なる言語を話す人間集団間の交流において、通訳の役割が不可欠であることは、古今東西変わらないだろう。しかしながら、多くの場合この役割は、その場限りのものであった。境界地域に住む人々はもちろん、商人、船乗り、戦争捕虜など、様々な理由により多言語能力を身に着けた人間がその場の需要に応じて通訳をつとめてきたのであり、逆に言えば、それで事足りたのである。例えば、現地の言葉を学習して布教に赴いたキリスト教宣教師は、現地政府と西洋諸国間の通訳をしばしばつとめた。東アジアの通事のように、通訳要員が一つの専門職として制度的に確立していることは、世界史的にみても稀なことなのだ。

さらに、現代の通訳とは異なり、東アジアの通事は純粋に言葉の仲介を担うのみならず、貿易業務から外交交渉まで、各国・各地域が有した対外関係の実務を一手に引き受けていた。通事たちは、民間レベルの貿易活動に関わる業務や、一定レベルの政治的交渉すら、中央政権に代わって自ら引き受けることで、各国間の価値観の衝突や矛盾の顕在化を未然に防いできたと言えよう。

このように、通事をより深く研究していけば、東アジア地域に共通する歴史的・地理的特性をうかがい知ることができる、と私は考えている。琉球からはじまった私の研究を、通事という「仲介者」を共通項に、東アジア地域全体へと拡大させていきたい。

（長崎大学教育学部助教）

史料探訪 79

如意輪観音菩薩坐像

山田美季（半蔵門ミュージアム客員研究員）

半蔵門ミュージアムは、真如苑が所蔵する仏教美術品を一般公開するために二〇一八年に開設した文化施設である。

いつでも運慶の仏像に接することができる都内唯一の美術館として、運慶作と推定される大日如来坐像を中心に、開かれた祈りの空間をコンセプトに、ガンダーラの仏伝浮彫や京都・醍醐寺中興の祖義演（一五五八～一六二六）と豊臣家にゆかりの不動明王坐像などを常設展示する。あわせて収蔵する仏像や仏画、経典などを定期的に入れ替えて公開し、関連する映像作品やパネル展示をとおして仏教美術や仏教文化の紹介につとめてきた。

昨秋からは、不動明王像と同様に醍醐寺から縁あって寄贈された如意輪観音菩薩坐像と二童子立像を新たに迎え、また大日如来像のX線断層撮影やボアスコープなどの科学的調査で得られたデータにもとづき製作した同像の像内納入品の原寸模型も加え、常設展示の一部をリニューアルしている。今回は新収の作品から、如意輪観音菩薩坐像についてお話ししたい。

如意輪観音の如意とは如意宝珠、輪とは法輪の略で、あらゆる願いを叶える如意宝珠と、煩悩を打ち砕くとされる法輪を持つ。醍醐寺においてはきわめて重要な尊格であり、醍醐寺の開祖聖宝（八三二～九〇九）が、上醍醐に結んだ草庵に最初に安置したのも准胝観音菩薩像と如意輪観音菩薩像だったと伝えられている。当館新収の如意輪観音菩薩坐像は、江戸時代初期の寛文九年（一六六九）に修復され、三宝院持仏堂に安置されたことが像底の朱書銘により知られるが、それ以前の伝来は明らかでない。

その姿は、『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』などに説かれる六臂である。経典にあるように、右第一手は頬に手を当てて有情を懸念し、第二手は一切の願いを満たす如意宝珠を捧げ、第三手は生類の苦を救うとされる念珠を持つ。左第一手は何事にも動じない意志を示すため、腕を伸ばして光明山に触れ、第二手は諸々の非法を浄める蓮華を持ち、第三手は無上の法を転じる輪宝を捧持する姿であらわされる。これらのうち左第一手がおさえる光明山とは

観音浄土補陀落山のことだが、現存する如意輪観音像のなかには、光明山の部分が失われたり、後補にかわったりするものも少なくない。本像は他の持物や六臂の多くは後世の修理時に補われたものと考えられるが、左第一手については肩から光明山までを含んで一材から彫り出しており、当初の造形を伝えている点が貴重である。

如意輪観音菩薩坐像　平安時代（10世紀）　半蔵門ミュージアム蔵

また、この像の姿について特に注目すべきは坐り方であろう。如意輪観音の坐法には経典における明確な規定がなく、こうした六臂をもつ如意輪観音像は、通常、右脚を立てて両足裏をあわせた輪王坐であらわされる。しかしながら、この像は右足を左腿の上に跏した半跏の姿勢で、左足を踏み下げて坐すところに特徴がある。これは古代に例の多い半跏思惟の菩薩像に通ずるもので、現存する如意輪観音の彫像には類例がほとんどなく稀有な姿である。

本像は頭体幹部をカヤの一材から彫り出す一木造りと呼ばれる技法で造られている。正面からみると、頭部が小さく、手足は長く、上半身が丈高で細身の伸びやかな印象だが、側面にまわると、背中から臀部、脚部は比較的肉付きがよく量感がある。最近の修理の際に行われたCT撮影により、眉や目の周り、鼻から唇にかけて木屎漆（こくそうるし）を盛り造形していることが明らかとなった。これらを除去してあらわれた面貌は修理前のものとは大きく異なり、ややつり上がる眼尻や、額から鼻梁線が垂直に降りる横顔などに中国風の感覚もうかがわれ、製作時期については、ひとまず平安時代中期、一〇世紀後半頃と考えているが、なお詳細な検討が必要であるといえる。

さらに興味深いことは、髻正面には小さな内刳りがあり、修理中に円筒形、高〇・八センチの木製舎利容器とその内部の舎利の存在が確認されたことである。髻に舎利を籠めることは、醍醐寺三宝院弥勒堂本尊の建久三年（一一九二）の快慶作弥勒菩薩坐像に例があり、弥勒菩薩を説く『慈氏菩薩略修愈誐念誦法』に弥勒像の頂上に舎利を納める功徳を説明していることとの関係が指摘されている。

六臂で半跏し片足を踏み下げる如意輪観音像の姿はきわめてめずらしく、髻に舎利を籠める点も注目される。なぜこうした姿がつくられたかということに関しては、平安時代以後に二臂の半跏思惟像が如意輪観音と呼称されていくなかで、それが六臂にまで及んだのではないかという説があり、そこに醍醐寺僧の信仰が密接に関わるのではないかという指摘もある。いずれにせよ、如意輪信仰の深い醍醐寺の事情を考慮して、さらに追求すべき問題が多く残されており、これからの研究の進展が期待される。

なお像には、寛文九年の修理時に造られた台座とそれ以後に造られた光背が付属していたが、現在は別保存としている。現状の台座は修理に際してあらたに造られたものである。蓮華部分の彩色は中世以前の仏画などを参照したイメージであり、現在は後世の修理により古色で仕上げられている観音像本体も、当初はこのような鮮やかな彩色がほどこされていた可能性が考えられる。

像底の朱書銘や髻内の納入品のほか、旧光背・台座や修理前の像の姿についても、二階ホールのパネル展示で解説している。展示室とあわせてご覧いただきたい。

半蔵門ミュージアムでは、四月二四日から九月一日まで、特集展示「音を観る　変化観音と観音変化身」の開催を予定している。特集展示では、今回紹介した常設展示の如意輪観音菩薩坐像とともに、新収の如意輪観音菩薩の画像を二点展示する。ひとつは繊細で優美な表現が特徴で、金泥と切金がもちいられた鎌倉時代の優品（展示期間＝四月二四日～六月三〇日）、もうひとつは向かって左下に訶梨帝母を描いた珍しい室町時代の作品である（展示期間＝七月三日～九月一日）。東京都心にあるとは思えない、仏教美術の濃密な空間に、ぜひ、お立ち寄りいただきたい。

半蔵門ミュージアム

【所在地】

〒102-0082
東京都千代田区一番町25
TEL：03-3263-1752
ホームページ　https://www.hanzomonmuseum.jp
𝕏（旧Twitter）@hanzomon_museum
Instagram@hanzomonmuseum0419

【交通アクセス】

●東京メトロ半蔵門線『半蔵門駅』下車
　4番出口（地上1階）左すぐ
●東京メトロ有楽町線『麹町駅』下車
　3番出口から徒歩5分
●JR『四ツ谷駅』下車　徒歩15分
●駐車場および駐輪場はございません

【展覧会】

2024年4月24日（水）～9月1日（日）
特集展示「音を観る　変化観音と観音変化身」

【開館時間】

10時～17時30分（入場は17時まで）

【休館日】

毎週月曜日・火曜日

【入館料】

無料
最新の開館情報は公式サイトをご確認ください。

編集長より

▼石川九楊先生の制作のすべてを収めた大冊『石川九楊全作品集』（全三巻、附別冊）がいよいよ刊行間近です。作品そのものの魅力についてはここで紹介するよりも、ぜひ先生の「特別寄稿」をお読みいただきたいと思います。一方、時に料紙からあふれ出さんばかりに力強く、時に消えてしまいそうなほど繊細な先生の書を印刷で表現することは、大変な挑戦でした。今回、その変幻自在な作品を再現するため、墨を三色のインクで印刷することにしています。作品の魅力にどこまで迫ることができるのか、大詰めの調整が続きます。

▼若手研究者による、独創的かつ学際的な研究成果を発信するべく、新レーベル「30s」を立ち上げました。コンセプトやレーベル共通の装幀の検討を経て、今春、いよいよ二冊を世に送り出すことができました。既存の枠組みにとらわれない若く柔軟な知性を発掘し、人文学に新風を吹き込む良書を生み出したいと思います。満を持して第2弾が刊行された「思文閣人文叢書」ともども、今後の展開にぜひご注目ください。

▼今年は歴史学研究会、大阪歴史学会などの大会に出店いたします。皆様に直接書籍をご紹介できる機会を楽しみにしております。

編集後記

▼初めての本作りに緊張はつきもの。刊行後にお会いして「こんなに陽気な方だったのか」と、著者の印象が変わることがあります。先生方の晴れやかなお顔を見るのが春の愉しみです。（R）

▼電子図書館（公共図書館の電子書籍サービス）に嵌っています。深夜の自宅でぬくぬくとお酒を飲みながら、にも関わらずまるで図書館に居るかのような感覚で本をつまみ読みできる多幸感に浸れます。（n）

▼お世話になった先生のご発表を聞きに行ってきました。「歴史における認知とはどういったものか？」なるほどと学生のようにメモをとりつつ、もう学生ではない…！この一年の早さに驚きました。（e）

▼京都ではコロナ後、観光客が増える一方で、なるべく人の来ない場所をねらっています。たとえ桜の季節でも、場所や時間帯しだいでよい瞬間に立ち会えます。心（だけ）は修学旅行の時のままです。（大）

▼表紙図版：『阿国歌舞伎図屏風』京都国立博物館蔵、出典：ColBase（https://colbase.nich.go.jp）

■定期購読のご案内

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信（おうとうつうしん） No.118
2024（令和6）年4月23日発行
発行　株式会社 **思文閣出版**
〒605-0089
京都市東山区元町355
tel 075-533-6860
fax 075-531-0009
e-mail pub@shibunkaku.co.jp
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
表紙デザイン　HON DESIGN

篠崎佑太（宮内庁書陵部研究職・中央大学兼任講師）著

【30s】

近世後期の大名家格と儀礼の政治史

3月刊行

A5判上製・三六八頁／**定価 二、五五〇円**

近世後期から幕末期にかけて、「内憂外患」の政治状況下で幕藩関係はいかなる変容を遂げたのか。

本書では、大名家格のひとつである殿席と、御目見などの殿中儀礼との関係を分析することで、その実態を追究する。とくに将軍家ゆかりの諸大名が控える大廊下下之部屋に着目し、同席をめぐって行われる幕府と大名たちとの政治的駆け引き、およびその影響を検討した。またペリー来航後、大廊下席の諸大名が政治的に急浮上していく過程や、幕府が諸大名をどのように遇したのかを、幕末期に将軍の拠点となる二条城・大坂城での殿中儀礼の具体的な様相とともに明らかにし、「衰微する御威光」の真相を探る。

【目次】

序　章

第一部　近世後期における大名殿席の展開

第一章　近世中期の幕藩関係と政治交渉―福井藩松平家の家格上昇運動を事例に―

第二章　十八世紀後期における大名家の家格の変化―福岡藩黒田家を事例に―

第三章　寛政期の江戸城殿中と殿席―幕府目付による「御座敷内通路」をめぐって―

第四章　文政・天保期における大名家の家格上昇と集団化―大廊下席大名を中心に―

第五章　嘉永期における御家相続と家格―川越藩松平家を事例に―

第二部　幕末期の幕府政治と大廊下席大名の政治参加

第六章　嘉永期における徳川斉昭「参与」の実態と影響

安政四年における大廊下席大名の政治動向―「同席会議」の上申書提出をめぐって―

第三部　幕末期の政治と殿中儀礼

第七章　文久の幕政改革と諸大名の政治参加―江戸城登城と「国事周旋」―

第八章　元治元年の二条城―殿中儀礼と幕府政治―

第九章　慶応期大坂城における殿中儀礼

終　章

清水翔太郎（秋田大学講師）著

【30s】

近世大名家の婚姻と妻妾制

3月刊行

A5判上製・三一四頁／**定価 九、九〇〇円**

二六〇余年にわたって泰平の世が続いたとされる江戸時代において、藩祖以来直系で家を継承できた大名家の事例は皆無に等しい。大名の子の短命化により安定した継承が極めて難しくなるなか、婚姻の実現と世嗣の確保は表向と奥向双方にとって重要課題となった。

本書は、これまで大名・藩研究が明らかにしてきた表向の政治構造と、ジェンダー史研究が明らかにしてきた奥向の実態とを統合し、17世紀から19世紀までの史料を元に、大名家における婚姻と家族構成員の実態を明らかにする。

【目次】

序章　本書の課題と構成

第一部　近世大名家の婚姻

第一章　近世前期における国持大名家の縁組

第二章　近世中後期における大名家の婚姻

第三章　近世後期における大名の娘の年齢操作と婚姻

第二部　近世大名家における妻妾制の展開と奥向

第一章　近世前期における大名居城奥向の構成員とその処遇

第二章　近世中期における大名の妻妾

第三章　近世大名の幼少相続と「看抱」・後家

第四章　近世中期の大名家における妻妾制の展開―「御袋様」に注目して

補論　大名の相続・人生儀礼と家族構成員―秋田佐竹義真を事例に

終章　総括と展望

表示価格は税込

村井祐樹（東京大学史料編纂所准教授）著

中世史料との邂逅

―室町・戦国・織豊期の文書と記録

4月刊行予定

A5判上製・五六〇頁／**定価 二、〇〇〇円**

東京大学史料編纂所に勤める著者が、様々な機会に、様々な場所にでかけ、合縁奇縁に出逢った様々な史料たち。それらを読解・分析し、未知の事実を浮かび上がらせること、そして史料自体の面白さを伝えることが本書刊行の最大の眼目である。

【予定目次】

犬歩当棒記――序章、のようなもの

〔論文編〕

第一章　南北朝期室町幕府における水論裁定――湖東の一用水相論から／附・柿御園山上郷用水沙汰記録

第二章　戦国期における六角氏と小笠原氏との関係について――成簣堂文庫蔵「小笠原文書」より

第三章　「管領」就任以降の六角定頼――当時天下の執権

第四章　三好にまつわる諸々事――『戦国遺文　三好氏編』より

第五章　松永弾正再考――京都におけるその勢威

第六章　幻の信長上洛作戦――出せなかった手紙

補論一　織田政権期の播磨国人間嶋氏の文書

第七章　秀吉の報・連・相――中国攻めをめぐって

補論二　本能寺の変直後における秀吉の預物対策

第八章　戦国期湯原氏の動向について――地方武士の苦闘／「湯原家文書」原本の検討から

第九章　毛利輝元と吉川家――三本の矢、その後

補論三　初期秀吉政権と材木

補論四　堅田文書に残った秀吉関係書状二通

〔史料編〕

附篇一　『戦国遺文　佐々木六角氏編』続補遺

附篇二　戦国時代佐々木六角氏関係記録史料集（稿）補遺

村井祐樹著

戦国大名佐々木六角氏の基礎研究

可能な限り一次史料を用い、六角氏や家臣の動向、実態など基礎的事実を明らかにする。

定価 一二、七六〇円

高野信治著

藩領社会と武士意識

武家領主支配という観点から、「藩領社会」における武士の意識をあぶり出す。

定価 八、八〇〇円

川岡勉著

戦国期守護権力の研究

戦国期の守護を軸にすえて多様な権力秩序の展開の様相をさぐる。

定価 九、九〇〇円

太田由佳訳／松田清注

訓読　豊後国志　【好評増刷】

岡藩藩主中川家所蔵本『豊後国志』を底本として読み下す。

定価 七、七〇〇円

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

倉本一宏（国際日本文化研究センター名誉教授）編

貴族とは何か、武士とは何か

3月刊行

A5判上製・六九六頁／**定価二、〇〇〇円**

約四百年にもわたり、貴族が栄華を誇った平安時代。平和な世から武士が発生し、政権を樹立するまでに至ったのはなぜか？貴族たちはなぜ武家政権の成立を許したのか？　そして武家政権下で公家が存続できたのはなぜか？

「貴族と武士」という日本史の最重要テーマを、古代・中世・近世・近代・東洋史の研究者約40名が集い議論する。

【目次】

はじめに　（寺内　浩）（倉本一宏）

第一部　古代

摂関期の武人と貴族　（下向井龍彦）
摂関期における武者の「優免」　（関　幸彦）
「王朝国家軍制論」の擁護―批判への回答
「王朝」観念と〝貴族道〟　（服藤早苗）
嫁取儀礼の成立―貴族と武士の婚姻儀礼の変容
一〇世紀の貴族社会における狩猟　（堀井佳代子）
―狩猟を伴う行幸を中心に
平安貴族の新宅・移徙の儀について　（龔　婷）
―敦煌文書宅経との比較研究
平安貴族と「ゐなか」　（久葉智代）
平安・鎌倉期の出産儀礼と公武―着帯儀を中心に
武士と触穢に関する覚書　（東海林亜矢子）
五体不具穢とは？　（上野勝之）
相撲・相撲人と武芸・武士　（佃　美香）
牛車をめぐる対話―新井白石と公家文化　（森　公章）
一〇世紀後葉地方軍制の一齣　（京樂真帆子）（告井幸男）

第二部　中世

武士論の成果と課題　（呉座勇一）
平安末～鎌倉時代の摂関家と武家勢力　（樋口健太郎）
文士と武士―鎌倉幕府評定衆家の軍事　（田中　誠）
貴族はいかにして生き残ったか
―藤原俊成を取りまく女性たちを中心に　（美川　圭）
里内裏について―両統迭立期の内裏　（野口孝子）
建武政権による元代仏教導入の試み
―渡来僧と聖節法要　（榎本　渉）
室町幕府将軍御台被官と附庸奉公衆　（木下　聡）
室町殿「公家化」の儀礼空間　（松永和浩）
伊勢国司北畠氏は「公家・貴族」か　（岡野友彦）
公家と武士のキメラ―鎌倉将軍藤原頼経　（青山幹哉）
「坂東武士」のイメージ　（野口　実）
「武士団」という語の成立について　（高橋昌明）
後鳥羽上皇や有力廷臣の笠懸などの武芸と馬場
―水無瀬離宮・上賀茂社を中心に　（豊田裕章）

第三部　近世・近代

近世前期、「首都江戸」の京都文化の摂取に関する考察　（石田　俊）
―権力都市・政治都市の権威化　（大石　学）
萩藩毛利家における公武婚　（磯田道史）
公家の震災復興と大名家
―文政京都地震を中心に
華士族身分と「家」意識　（松田敬之）
―名族後裔による改姓事例の紹介
麝香間祗候の役割　（刑部芳則）
―嵯峨実愛の動向を中心に

第四部　武士の国際比較

中国における文と武―侠と武人、門閥貴族、士大夫・郷紳と文人　（伊東貴之）
武と文―馬上で天下を治むるをあたわず　（劉　暁峰）
武士と中国文化
―「児干説話」の検討を中心として　（榎本淳一）
「白馬の禍」からみる中国古代史の文武関係　（梁　暁弈）
八～一〇世紀の東アジアにおける「自立する「武」」の台頭とその行方　（宋　浣範）
西洋の騎士と王権の関わり―カスティーリャ・レオン王国を事例として　（滝澤修身）

表示価格は税込

有富純也・佐藤雄基編

摂関・院政期研究を読みなおす

A5判並製・四〇〇頁／**定価 五、〇六〇円**

摂関・院政期研究の現在を知るには何を読んだらよいのだろう？摂関・院政期は、戦後歴史学において古代から中世への移行期として注目され、双方の研究者が各自の立場から研究を蓄積してきた。しかし、近年は両者の対話が十分にできておらず、議論が深まっていないのではないか。それゆえ、何が最新の研究成果で、どこに議論の余地があるのか、外からは見えにくくなっている。こうした問題意識のもと、古代・中世を専門とする中堅・若手の研究者が、それぞれの専門から研究史を振り返り、混沌とした研究状況を整理して、研究の最前線と展望を示す。

東寺文書研究会編

東寺執行日記　第二巻

A5判上製函入・三一八頁／**定価 一五、四〇〇円**

執行（しぎょう）は長官僧である東寺長者系列の寺内の要職。堂舎・仏像・各種儀式の法具などの管理・保全の責任者であり、寺内の庶務を担当した。本日記はその公務記録で、鎌倉時代末期から近代にいたる長大な記録が残る。本シリーズではその中世部分を翻刻する。業務記録として東寺の年中行事等の歴史を伝えるだけではなく、当該期の政治・社会の中心である京都政界・社会に関する、長期にわたる定点観測の貴重なデータを提供する。全三巻のうち第二巻。

藤井譲治編

織豊期主要人物居所集成〔増補第3版〕

初夏刊行予定

B5判上製・約六五〇頁／**定価 八、八〇〇円**

二〇一六年の第2版刊行から、約8年。織豊期の重要人物たちは何時何処で何をしていたのか、数多の研究者が調べ上げ集成した基礎資料を、ついに第3版として大幅アップデート。居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全であり、公にされることもきわめて少なかった。本書は、現在知りうる限りの主要人物の居所情報を編年で掲載。

第3版では従来の25名に加え、新たに松平家忠、徳川秀忠、宇喜多秀家、前田玄以、増田長盛、長東正家、島津義久、島津義弘、立花宗茂の9名を加え、豊臣政権の五奉行・五大老を完備した。辞書的な利用はもちろん、通覧すれば秀吉の天下統一の道程や戦国武将の動静、同時代人たちの交流を詳細に追える。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

木村可奈子（滋賀県立大学講師）著

東アジア多国間関係史の研究

―十六―十八世紀の国際関係

3月刊行

A5判上製・三〇八頁／**定価 六、六〇〇円**

16―18世紀の東アジアをフィールドに、直接的・間接的にかかわり合う国々の史料を駆使して、各国の交渉の実態を描き出し、東アジアの多国間の関係を検証する。特定の国や地域の歴史にとらわれず、明清中国・朝鮮・日本・琉球・シャムの事例を取り上げることで、各国の「対外関係史」をベースにした東アジア国際関係史研究では見えてこない側面を浮かび上がらせる。

【目次】

序　章　東アジアの多国間関係史を考える
第一章　明の対外政策と冊封国暹羅
―壬辰戦争におけるシャムからの借兵論を手掛かりに
第二章　勘合とプラーチャサーン
―田生金「報暹羅國進貢疏」からみたシャムの国書と対明・対日関係
第三章　日本の琉球侵略後の明の対日警戒
第四章　日本のキリスト教禁制による不審船転送要請と朝鮮の対清・対日関係
―イエズス会宣教師日本潜入事件とその余波
第五章　三藩の乱時期の日本の情報収集活動と朝清関係
第六章　冊封使李鼎元の琉球認識と清・琉球・日本・朝鮮四国の国際関係
―柳得恭手稿本『燕臺再游録』をもとに
附　章　柳得恭『燕臺再游録』の諸本と遼海叢書本のテキスト問題について
終　章

中島楽章著

大航海時代の海域アジアと琉球

―レキオスを求めて

海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明。

定価 一〇、四五〇円

稲賀繁美編

海賊史観からみた世界史の再構築

―交易と情報流通の現在を問い直す

経済史、国際法、情報流通論などの分野の知見をも学際的に取り入れ、葛藤の現場を解明する。

定価 一五、四〇〇円

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

大航海時代の日本と金属交易

最新の鉛同位体比分析の成果から、日本の銅生産や金属流通、南蛮貿易の意義に新たな視角を提示。

定価 三、八五〇円

松浦章著

江戸時代唐船による日中文化交流

【オンデマンド版】

日中双方の史料を用いることで、長崎貿易を多角的に論じる。

定価 一〇、七八〇円

表示価格は税込

大島真理夫著

近代日本経済の自画像

―「西洋」がモデルであった時代

2月刊行

A5判上製・五七〇頁／**定価 八、八〇〇円**

日本にとって西洋は明治以来、21世紀にいたるまで、自国の立ち位置を確認する比較軸＝分析モデルであった。しかし今日の世界を見渡すと、そうした時代は終焉を迎えたようである。本書は、過去一五〇年にわたる日本の自国認識の変遷を「西洋がモデルであった時代」ととらえることで見えてくるものを探ろうとする試みであり、求められる新たな自画像を地に足の着いたものにするために不可欠な基礎作業を提示する。

【目次】

序　章　自国認識の形成

第Ⅰ部　自国認識の変遷

第1章　第一期（1858～1886年）＝「半開国」という扇動と複数の自画像

第2章　第二期（1886～1905年）＝共有された「文明国」の自信

第3章　第三期（1905～1931年）＝「一等国」の自負心とその動揺

第4章　第四期（1931～1945年）＝自作した「孤立国」の焦燥

第5章　第五期～第八期（1945～2008年）と「現代」

第Ⅱ部　自画像変遷の点描

第1章　田口卯吉の外国貿易論（第一～二期、幕末開港～明治期外国貿易の評価）

第2章　日本経済史学の成立・展開と黒正巌（第一～三期、日欧発展の並行性の認識）

第3章　1920年代の猪谷善一（第三期、「新自由主義」の主張）

第4章　1930年代の猪谷善一（第四期、全体主義への転換）

第5章　遠景としての日本資本主義論争（第四期、後進性認識の深化）

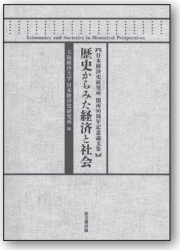
終　章　自画像変遷の位相

大阪経済大学日本経済史研究所編

歴史からみた経済と社会

日本経済史研究所開所90周年記念論文集

A5判上製・一〇〇〇頁／**定価 一七、〇五〇円**



大阪経済大学日本経済史研究所の開所90周年を記念して刊行する論文集。「回顧編」6本、「論文編」29本の二部編成。本庄栄治郎・黒正巌以来の国際的な視野を引き継ぎ、広範囲な時代・地域を対象とする論考を集め、現在の経済史研究の最前線を示す。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

万博学研究会編

万博学／Expo-logy 第2号

【特集　万博と冷戦】

A5判並製・二一八頁／**定価 二、二〇〇円**

特集は、万国博覧会がいかにして今日の姿になったのかを探る、戦後万博シリーズの第二弾、「万博と冷戦」。

「万博とは世界を映す鏡である」という万博学の立場から、ブリュッセル（一九五八年）、モントリオール（一九六七年）、大阪（一九七〇年）など冷戦期に開催された万博と東西両陣営とのかかわりを論じる多様な角度の論考で、万博に映った冷戦の時代を活写する。そのほか、最新の万博研究とコラム、エッセイに加え、ドバイ万博の日本館、および二〇二五年大阪・関西万博のパナソニックグループパビリオン、ウーマンズパビリオンを設計する建築家・永山祐子氏のインタビューを収録する。

【目次】

〔特集〕 万博と冷戦

特集趣旨

一九六七年モントリオール万博
―大阪万博との比較を通じて
（有賀暢迪）

アメリカ対外情報政策の延長線上の大阪万博（森口（土屋）由香）

対峙と売込み―冷戦期万博における東側陣営の二重戦略
（市川文彦）

〔コラム〕 モーリス・タックマンのNew Arts
（辻泰岳）

冷戦と脱植民地化の接点としての万国博覧会研究
（池田亮）

〔インタビュー〕

パビリオン建築に関わって
―ドバイ万博から大阪・関西万博へ（永山祐子、聞き手：佐野真由子、岸田匡平）

〔万博学の最前線〕

天皇の儀礼空間としての博覧会
―内国勧業博覧会と二つの博覧会構想に注目して
（長谷川香）

図書館と万博の関係を再考する
―近年の万博関連公式資料収集の進展から
（陶成・駱雲卿）

〔ロングエッセイ〕

博覧会資料と関わって二五年
（石川敦子）

〔これも万博資料〕

〔コラム〕 展覧会「万博と仏教」を監修して
（君島彩子）

〔コラム〕 カレンダーにみる一九七〇年大阪万博
（中牧弘允）

万博学研究会編

万博学／Expo-logy 創刊号

【特集　植民地なき世界の万博】

A5判並製・二〇〇頁／**定価 二、二〇〇円**

論集『万博学―万国博覧会という世界を把握する方法』で打ち出した「万博学」という研究視角の、さらなる共有と深化をはかるため最新の研究成果を毎年発信。創刊号では戦後の万博と植民地の関係を特集。万博はいかにして現在の姿になったのかという問いに、植民地を切り口にして迫る。

佐野真由子編

万博学―万国博覧会という、世界を把握する方法

B5判上製・五五六頁／**定価 九、三五〇円**

万博学、それは万国博覧会という研究対象を通じて可能になる、大きな学際的人間学の営みである。19世紀半ばに始まり、今日につづく世界最大の公式催事―、本書は32本の論考で、万国博覧会のさまざまな側面に着眼し、掘り下げたその先に、人類世界の歩みを浮き彫りにする。万国博覧会とは「世界を把握する方法」なのだ。

表示価格は税込

琉球国王の肖像画「御後絵」とその展開

平川信幸（沖縄県立博物館・美術館主任学芸員）著

3月刊行

B5判上製・二五六頁＋口絵二八頁／**定価 一三、二〇〇円**

琉球絵画は、その歴史と同じように独自の輝きを放っていたが沖縄戦によって多くの作品が失われた。今日、残されている琉球絵画の作品は、日本や中国、韓国など東アジア諸国との交流の中で展開した作品群の一角でしかない。その研究は、辛うじて残った断片を手掛かりに、作品の存在を証明していくことから始めなければならないのである。

本書は、琉球絵画の中でも、国王の肖像画「御後絵」や『片目地頭代（喜久村絜聡）画像』など数々の名作が描かれた肖像画に焦点をあて、現存する作品だけでなく戦前に撮影されたガラス乾板や豊富な文献資料によって、その描写的特徴や様式の変遷などの考察を行った、琉球絵画史上初の体系的叙述である。

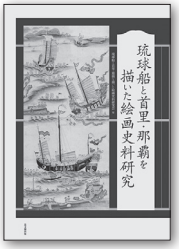
【目次】

序　章　御後絵の歴史と戦前の保管をめぐる経緯について
第1章　北東アジアにおける御後絵の図像的特徴
第2章　御後絵の国王衣裳の考察
第3章　御後絵の家臣団について
第4章　御後絵に描かれた家具および道具類について
第5章　『程順則画像』について
第6章　『喜久村絜聡（片目地頭代）画像』について
第7章　首里士族の肖像画の成立と展開
第8章　
終　章

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

B4判上製・一八四頁／**定価 二〇、三五〇円**



大型図版で近世琉球の姿が色鮮やかによみがえる。第二尚氏時代から明治時代前期（18～19世紀）にかけての、琉球の船と首里・那覇の景観を描いた絵画史料を集成。関係史料を可能な限り広範囲に収集し、計65点を大型判カラー図版で掲載。従来の図録や書籍では観察が困難だった細部の考察や史料間の比較を可能とした。

収録図版には、最新の研究成果により解説を加えるほか、琉球史、対外交流史研究に携わる執筆者による10本の論考を収録。さらに、古地図・古写真・落款をモノクロで掲載する。

これからの琉球史研究の水準を格段に引き上げうる基礎的史料集。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

園城寺監修／園城寺の仏像編纂委員会編

園城寺の仏像　全五巻

1月完結

A4判上製函入／定価 第一巻：一三、二〇〇円 第二～五巻：各一九、八〇〇円〔第四巻品切〕

三井寺として親しまれている園城寺の開祖、智証大師の生誕一千二百年を記念して、園城寺および縁の寺に所蔵される仏像を網羅的に収録するシリーズ。最終第五巻には、宝冠釈迦如来坐像など、南北朝～江戸彫刻の粋を収録するほか、明治期に撮影された仏像の古写真を収録。現在では亡失した部位や、明治期の修復前の貴重な姿が写し出されている。図版はすべてカラー掲載。

並木誠士（京都工芸繊維大学教授）編

近代京都の美術工芸Ⅱ

―学理・応用・経営

幕末の開国以来、美術工芸をめぐる状況は急速に近代化を遂げる。それは現在の「芸術」のもつ流通イメージとは異なり、輸出振興や産業の活性化と密接に結びついた様相を示していた。本書の舞台となる京都でも、美術工芸をめぐり新しい動きが勃興する。しかし京都の動きは必ずしも中央の動向と連動しているわけではなく、明治政府に先行してつぎつぎと新しい施策が打ち出され、独自の近代化路線を模索していた。これを京都の革新性と捉えることもできるが、同時にそれは、「みやこ」でなくなることへの強い危機感のあらわれでもあった……。本書では、そうした京都特有の時代状況下で展開した近代美術工芸の世界を総合的に描き出すことを試みる。

今夏刊行予定

A5判上製・五三〇頁／予価 一三、二〇〇円

並木誠士編

近代京都の美術工芸

―制作・流通・鑑賞

いまだ途上にある、近代京都の美術工芸研究を更新し、その作品や資料の評価、位置づけを問い直す論集。

定価 一二、一〇〇円

横田香世著

パステル画家　矢崎千代二

―風景の鼓動を写す

「旅の絵師」矢崎の生涯を辿り、パステルを巡る小史を記す。

定価 一八、七〇〇円

奈良国立博物館編

仏師快慶の研究

快慶全作品の大判カラー写真を収録した快慶研究の決定版。

定価 七七、〇〇〇円

今夏刊行予定【Shibunkaku Works】

矢野貫一著

小絵馬順礼（全2巻セット）

国文学者・故矢野貫一氏が源氏物語の講読会の会報に連載した社寺の小絵馬（京都と台湾）を取り上げるエッセイ集。

定価 三、〇〇〇円

表示価格は税込

川﨑博著

応挙の日記 天明八年～寛政二年

―制作と画料の記録

5月刊行予定

B5判上製・二一四頁／**定価 六、〇〇〇円**

応挙の画料はいくらだったのか？

近世の京都絵師、円山応挙（一七三三～九五）が残した、天明八年八月一日から寛政二年九月六日までの制作の記録が、屏風に仕立てられた形で発見された。「制作日誌」とも呼べるその内容からは、注文や画料の授受といった絵師の日常的ななりわいから健康状態、人間関係、制作実態、さらには当時の二朱銀の流通状況なども読み取れ、応挙研究のみならず、経済史史料としても高い価値を有する。

廣田孝著

竹内栖鳳と髙島屋

―芸術と産業の接点

A5判上製・三二六頁／**定価 一〇、七八〇円**

「何が京都画壇に近代化をもたらしたか」という問いに対して、従来の研究では、竹内栖鳳の渡欧（1900年のパリ万博視察）が重大な契機であったと語られてきた。本書は、髙島屋史料館が保管する輸出向け染織品の下絵など関連資料を駆使して、栖鳳が渡欧以前に髙島屋画室において行った活動を復元し、画室における下絵制作の実践こそが栖鳳の画風を進化させ、京都画壇の近代化を導いたということを明らかにするものである。

冷泉為人著

円山応挙論

応挙とはどのような画家なのか。そして、応挙の写生とは何なのか。

定価 一〇、四五〇円

河野元昭著

江戸絵画　京と江戸の美

江戸絵画の光はすべて西方から射してきた――。

定価 一六、五〇〇円

古画備考研究会編

校訂　原本　古画備考（全5巻セット）

岡倉天心の座右にもあった、江戸時代の『古画備考』原本の姿を忠実に再現。**定価 七七、〇〇〇円**

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

原本を徹底的に解剖することにより、江戸時代後期に繰り広げられていた古画研究ネットワークの実態を浮かび上がらせる。

定価 一〇、一二〇円

表示価格は税込

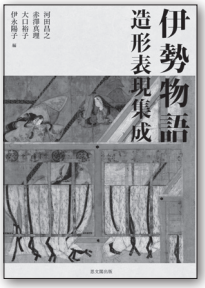
思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子編

伊勢物語造形表現集成

5月刊行

B5判上製・四三二頁（カラー二四〇頁）／**定価 二七、五〇〇円**



伊勢物語を題材とする絵画、書跡、工芸などの造形約一五〇点に焦点を当て、表現の多様性や創作の独自性を解説。雅な王朝文化の象徴である伊勢物語絵の受容のあり方に、造形表現の観点から迫る。

伊勢物語絵の専門研究者陣による総説と論考、伊勢物語絵を読み解くにあたってかせない画題を個別に分析する「モチーフ集」、より広範なテーマを扱う「コラム」を収載。巻末には作品総覧・所蔵館情報などを掲載。

伊勢物語をはじめ、物語絵研究をこころざす入門者から専門家まで、必携の一書。

【目次】

総論

伊勢物語と造形／伊勢物語受容年表 （河田昌之）

図版解説

絵　画（絵巻・色紙／宗達・光琳・抱一ほか／岩佐・土佐・住吉・狩野ほか／屏風・画帖／見立て／浮世絵／業平像／版本・パロディー／かるた・合貝）

書　跡（古筆・写本）

工芸（漆工／印籠／茶器・陶磁器／刀装具／染織／能面）

コラム

モチーフ集

論考

モチーフからみる伊勢物語絵―その多様な背景― （大口裕子）

伊勢物語の造形表現の領域の拡がり―歌仙絵にみる在原業平像の造形イメージの形成から― （河田昌之）

近世染織における伊勢物語の意匠―現存小袖資料の八橋模様ほか― （伊永陽子）

建築・庭園における伊勢物語の意匠―室内装飾・庭園の「八橋」を中心として― （赤澤真理）

附録

技法・用語解説／主要参考文献／伊勢物語絵の主な舞台／作品総覧（英訳タイトル付）／所蔵先一覧

伊勢物語絵研究会編

住吉如慶筆 伊勢物語絵巻

絵巻全体の構成や場面解説および解釈の最新研究成果を提示。

定価 三〇、三六〇円

大津透・池田尚隆編　4月増刷

藤原道長事典―御堂関白記からみる貴族社会

『御堂関白記』に出る主要語句、約1050項目と各分野の詳細な解説を収録。

定価 六、六〇〇円

逸翁美術館・池田文庫編

源氏物語　遊興の世界

屏風や画帖などに鮮やかに再現された「遊興」の世界をたどる。

定価 一、一〇〇円

荒木浩著

【思文閣人文叢書】

『今昔物語集』の成立と対外観

古代説話集の成立から『今昔物語集』の生成へという文学史、仏教文化史の潮流を論じる。

定価 九、九〇〇円

表示価格は税込

苫名悠（佛教大学講師）著

失われた院政期絵巻の研究

4月刊行

A5判上製・三五八頁／**定価 八、二五〇円**

平安時代末期に制作された絵巻の諸作品は「院政期絵巻」と総称され、現存する最古の絵巻群として、早くから美術史学の研究対象として取り上げられてきた。一方で、多くは史料にその名が見えるものの原本が失われており、これらの作品が美術史学の研究対象として取り上げられる機会は少ない。本書は、原本が失われた絵巻作品を積極的に取り上げ、模本によってその絵画表現を分析することなどを通じて、これらの作品を含めた院政期絵巻の再評価を試みたものである。

【目次】

序章　本書の問題意識・課題と作品分析方法・構成
第一章　承安本《後三年合戦絵巻》の絵師明実と制作環境について
第二章　承安本《後三年合戦絵巻》の制作目的と院政期絵巻における位置について
第三章　後白河院政期における「似絵的表現」の機能をめぐって
第四章　《彦火々出見尊絵巻》に描かれた海辺の場景をめぐって
第五章　《勝絵》の美術史的位置について
第六章　《異本病草紙》の美術史的位置について
第七章　《福富草紙》における院政期絵巻の絵画表現の摂取について
終章　院政期絵巻研究の展望

稲本泰生編

釈迦信仰と美術

―作品解釈の新視点

A5判上製・六四〇頁／**定価 一三、二〇〇円**

釈迦の「生」は、いかに捉えられてきたか。仏伝（釈迦の一代記）の物語、その舞台となった聖地、釈迦関係の聖遺物などにまつわる仏教徒の営為と文物の関係を、具体例に即して検証し、歴史上に位置づける。第一線の研究者13名が、釈迦イメージの形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上がらせ、新たな研究視点を提示する共同論集。

【目次】

『釈迦信仰と美術―作品解釈の新視点』序説　（稲本泰生）

第Ⅰ部　釈迦の生涯をたどる―仏伝と仏蹟巡礼の美術

いわゆる「仏陀なき仏伝図」に表現されたブッダと声聞乗（有部および大衆部）の仏身論について　（外村中）

南アジア初期仏教美術における聖地表象―仏伝図との関係を中心に　（島田明）

ガンダーラ地方における初期の仏伝図の探究―ラニガト寺院址出土浮彫画像帯の分析から　（内記理）

聖地と光の幻影―女神マーリーチーをめぐって　（マイケル・ウィリス）

安塞大仏寺四号窟における図像構成の意義と北朝期の仏伝表象　（稲本泰生）

第Ⅱ部　釈迦の姿をあらわす―仏のかたち人のかたち

佛從何出生―ブッダイメージの中国化と二元化　（岩井共二）

草座釈迦像とその儀礼―宋元江南仏教儀礼の中世日本への伝播　（西谷功）

一休宗純賛「苦行釈迦図」（京都・真珠庵）の図像的淵源　（板倉聖哲）

天平様式観の形成―日本古典美術の構築と受容　（中野慎之）

第Ⅲ部　釈迦の不在をこえる―涅槃表現の諸相

初唐期及び奈良時代の涅槃表象と涅槃観　（田中健一）

「応徳涅槃図」再考―原本の存在とその絵画史的位置　（増記隆介）

京都国立博物館蔵釈迦金棺出現図に関する諸問題―主題の観点を中心に　（大原嘉豊）

達磨寺所蔵仏涅槃図考―釈迦の姿形と賛文を中心に　（谷口耕生）

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

館野まりみ著

女かぶき図の研究

【思文閣人文叢書】

3月刊行

A5判上製函入・三四八頁／**定価 七、七〇〇円**

お国によって始められたかぶきは、その後、遊女たちによって模倣され、十七世紀初頭の京都を中心に地方に拡がった。近世の幕開けとともに絵画史に新しい画題やモチーフを提供することとなったお国や遊女によるかぶき―すなわち、女かぶき―は、どのような意味や役割を担って描かれたのか。同時代の鑑賞者はそれをどのように捉えたのか。

まず、女かぶきの演目とその変遷の経緯を整理し、描かれた芸態の意味を読み解く。次に、女かぶきを取り上げる絵画の真の主題と制作意図や背景、絵師や注文主と鑑賞者を探り、さらに、次世代の婦女遊楽図とのつながりを示す。その上で、遊楽図再考に向けて試論を提示する。

【目次】

序

第一部　お国かぶきと遊女かぶき

第一章　お国かぶき―カブキモノから「かぶき者」へ

第二章　遊女かぶき―模倣から創造へ

年表「女かぶき関連記録」

第二部　女かぶき図屏風の諸相―真の主題と機能

第一章　追慕・追善―『阿国歌舞伎図屏風』（京都国立博物館）

第二章　記念／祈念・祝儀―『清水寺遊楽図屏風』（MOA美術館）

第三章　敬慕・追憶―『阿国歌舞伎図屏風』（出光美術館）

第三部　女かぶきの記憶とその痕跡

第一章　懐古―『機織図屏風』（MOA美術館）

第二章　憧憬―『桜下弾弦図屏風』（出光美術館）

結びにかえて―「遊楽図」再考に向けて

中世日本研究所編

無外如大尼　生涯と伝承

―中近世の女性と仏教

Mugai Nyodai: The Woman Who Opened Zen Gates

5月刊行

日英バイリンガル、B5判コデックス装・四四八頁／**定価 四、九五〇円**

女性と仏教の関係を考えるうえでもっとも重要な存在である無外如大尼。円覚寺開山・無学祖元の法を嗣いだ高僧であり、後世の尼僧たちに多大な影響を与え、今なお京都の尼門跡寺院がその法灯を継いでいる。如大尼の生誕八百年を記念して、日・米の研究者が謎多き無外如大尼の出自や人物像を明らかにし、女性史・仏教史の新たな研究成果として日本語・英語、完全バイリンガルで紹介する。初掲載となる貴重な史料を多数オールカラーで収録。

無外如大尼生誕八百年に寄せて　臨済宗円覚寺派管長　横田南嶺

『無外如大尼　生涯と伝承―中近世の女性と仏教』刊行によせて　宝鏡寺門跡　田中恵厚

「正脉庵」「眞如寺」の如大さん　相国寺派眞如寺住職　江上正道

無外如大研究の今　モニカ・ベーテ／原田正俊

第一章　無外如大と景愛寺

【史料】理宝寄進状案／如大譲状／法衣相承次第　ほか

第二章　無外如大―当時を伝える言葉と物　モニカ・ベーテ

第三章　無著―ひとりの女性としての存在　カレン・ゲーハート

第四章　遠忌法要から見る如大尼鑽仰　パトリシア・フィスター

第五章　無外如大伝の生成に関する基礎的考察　米田真理子

第六章　無外如大―徳厳理豊による復興と再構築　モニカ・ベーテ／パトリシア・フィスター

【史料】景愛開山資寿願正脈剏建如大和尚伝／胡蝶の夢語　ほか

如大の人生を解きほぐす歓び　バーバラ・ルーシュ

無外如大尼坐像（眞如寺）修復報告画像

表示価格は税込

思文閣グループの逸品紹介

美の縁（びよすが）

飛沫によるオートマティズム

ロバート・マザーウェル

ロバート・マザーウェルはジャクソン・ポロックやマーク・ロスコらとともにアメリカを代表する抽象表現主義の作家である。スタンフォード大学などで哲学を学んだのち、一九四〇年代初期には、新たにアメリカに移住してきたヨーロッパ出身のシュルレアリスム運動に属する作家たちと親しく交流し、自らの作家としての立ち位置を確立しようと試みていた。

マザーウェルが好んだ「オートマティズム」は、理性の介在なしに意識下のイメージを描くという、シュルレアリスムの中心的な技法である。彼はこの手法を独自に発展させ、抽象表現主義の基礎を築くうえで、非常に重要な役割を果たした。

一九六六年の年記を持つ本作〈飛沫によるオートマティズム〉は、日本の和紙との出会いにより産まれた作品の一つである。色彩の用法についてマザーウェルは、黄土色は大地を表し、青は空や海を表す、というように「単純なシンボルとして」使う、と説明している。黒と白について、彼は次のように言う。「黒は、厳密にいえば色ではなく、非存在といえるものだ。だから、黒と白、存在と非存在、生と死という対照への情熱的興味ほど自然なものはない」。

（思文閣銀座・佐藤寿文）

思文閣大入札会

ご売却を検討されているお客様の美術品を
求める方へとお引き合わせする、思文閣独自の入札会です。

大入札会専用サイト
https://sale.shibunkaku.co.jp
※初めて利用される方は会員登録が必要となります。

思文閣公式 X

大入札会・個展情報等、随時更新中

@G_SHIBUNKAKU

SHIBUNKAKU
思文閣

思文閣古書資料目録

其姿紫の写絵
全一帖

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)752-0005 FAX(075)525-7155
https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル
「Shibunkaku Works」
思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL(075)533-6860 FAX(075)531-0009
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
pub@shibunkaku.co.jp